

新・農業経営者ルポ／第182回

一鍬ずつ切り拓いた原野

愛媛県にある西日本最大のカルスト台地・四国カルストは「四国の屋根」と呼ばれる。その標高1000mを越える高地にある大野ヶ原には牧草地が広がり、すり鉢状の地形に畜舎やサイロ、家屋が点在する。黒河高茂（90）は、戦後間もなくこの土地に入植し、熊笹の生い茂る原野を畑に変えた。戦後に開拓されたなかで最も厳しい条件といわれた場所で、酪農と高原野菜という農業経営のモデルを打ち立てたのだ。経営は長男の正高（61）、そして孫の尚紀（23）と佳紀（21）に引き継がれている。

文・写真／窪田新之助、山口亮子、写真提供／黒河高茂

高冷地の気候を生かす

大野ヶ原へと続く大規模林道は、急峻な山の斜面を幾度も蛇行しながらぐんぐん上へと登っていく。車を走らせてすぐ、下界とは違うひんやりとした空気を感じるようになった。30分ほど上へ上へと登っていくと大野ヶ原に出る。気候は青森や北海道に近く、取材に訪れた秋口は、下界との温度差が5、6℃もあった。

集落が始まってすぐのところに、「高原やさい　だいこん」と看板に大きく書かれた無人の直売所がある。ここを運営するのが黒河高茂だ。畑で収穫したダイコンを並べ、客に好きなだけ紙袋に詰めてもらい、買った分のお金を入れてもらう。愛媛や高知ナンバーの車がひっきりなしに直売所の前に止まる。車で2時間ほどかけて家族で訪れた男性は「毎年買いに来ます。味が全然違う」と言い、ダイコンを8本ほど紙袋に詰めていた。

「大野ヶ原大根」は愛媛県内はもちろん、四国ではよく知られたブランド野菜だ。下界でまだダイコンが出回らない8月から出荷を始め、季節を先取りする。果肉の軟らかさとほんのりとした甘みが特徴だ。鮮度を保つため、洗わず、土が付いたままで出荷する。

高茂に軽トラックで畑まで案内してもらった。森とのはざまにあり、なだらかな起伏のある畑では娘夫婦がダイコンの収穫をしていた。連作障害にならないよう、ダイコンを2、3年作った後は牧草地にする。畜舎で出た牛糞をたい肥にし、畑にすき込む。

「畑に有機質を十分に入れとります。そのため、病気に強く、あまり農薬は使いません。朝晩どんな日照りでも必ず露をかぶるので、水分が十分あって軟らかいダイコンができます」（高茂、以下同じ）

大野ヶ原では高冷地の気候を生かしたダイコンをはじめとする高原野菜やデルフィニウムといった花卉が栽培され、酪農も盛んだ。いまでは観光地でもあり、カフェやソフトクリームの販売店もある。周辺地域で過疎化が進行するなか、一度都会に出てもUターンする後継者が多く、集落には若者が多い。27世帯91人（8月末時点）の集落に未就学児と小学生を合わせると20人ほどがいる。

牧歌的な風景が広がり、後継者も戻ってくる、ある意味恵まれた地域だ。そんないまの大野ヶ原とはまったく異なる厳しい世界が、かつて広がっていた。畑の脇に群生している熊笹を指さし、高茂が話す。

「元々ここは熊笹と雑木が生えておったのを、一鍬ひとくわ、畑にしていきました。いまなら1日あったら、大概のことができますね。当時は、1日なんぼやっても14、5坪しか耕せないんですね」

高茂が大野ヶ原に入った当初、そこは何もない原野だった。戦後に開拓された土地のなかでも最も厳しいといわれた開拓の歴史を、高茂のこれまでの歩みを通じて振り返りたい。

開拓農業に将来を見いだす

高茂は1929年、愛媛県丹原町（現・西条市）で生まれた。14歳で

愛媛県西予市　黒河 高茂

くろかわ・たかしげ　1929年、愛媛県丹原町（現・西条市）生まれ。43年、鹿児島県海軍航空隊に予科練習生として入隊。46年、愛媛県開拓基地農場勤務。48年、農林省中央開拓講習所入所。49年、愛媛県開拓協会の指導員となり、大野ヶ原実験農場に着任。50年、指導員を辞して大野ヶ原開拓地に入植し、初代大野ヶ原開拓組合長に就任。著書に『大野ヶ原に生きる　四国カルスト開拓一世の証言』（アトラス出版）がある。

一鍬ずつ切り拓いた原野

予科練に志願し、鹿児島県海軍航空隊に入隊。鹿屋航空隊で終戦を迎えた。特攻での死を覚悟していた極限状態が突然崩れ去り、これからどうすればよいのかと呆然としたという。その後、日本人が皆飢えに苦しむのを見て、「敗戦国日本を救わねば」という思いを強くしていった。

開拓農業について知り、46年、松山市の愛媛県開拓基地農場で開拓者に農業を指導する職に就いた。

48年に静岡県にある農林省中央開拓講習所に入所し、全国各地から集まった仲間と共に実習と講義の両面から開拓農業を学んだ。翌49年に20歳で中央開拓講習所を修了し、愛媛県開拓基地農場の指導員になった。そして同年9月、大野ヶ原実験農場に着任する。

「当時はどこに行くにも歩かないかんので困りました」

初めて大野ヶ原を訪れたとき、バスの終着点は直線距離で20㎞近く離れたところにあり、ここからリュックを背負って歩いた。道路事情が良くなったいまも、かつてのバスの終着点から大野ヶ原までは車で1時間以上かかる。民家に1泊してたどり着き、熊笹と萱が生い茂るなかに拓かれた細い道の先にある、掘立小屋で暮らすことになった。電気がないので、下界と連絡するには毎回山を上り下りしなければならなかった。

仕事は作物の適地調査をすることだった。陸稲、雑穀、バレイショなどさまざまな作物を試した。しかし、なかなか成果は得られない。バレイショが5月末の霜で一晩で全滅したこともあった。現地には48年から7戸の実験農家が入っていた。ただ、農家は冬場になると地元に帰って日銭を稼ぎ、春に戻るという生活だった。なんの保証もなく、営農で生活できないため、残ったのはわずか1戸だったそうだ。

そんな状態にもかかわらず、50年に100戸の開拓計画が立てられ、国から認可が下りた。第一次募集として30戸が募集され、入植者が次々とやってきた。

「家もない、池の水を飲まないといけない、電気もない。そういうなんもない原始生活のなかで『さあ、入れ』といって、30戸を入れた。いまだったら人権問題ですよ」

自ら一開拓者に

土地の区割りは図面上で線引きしただけで、営農に適しているかどうかは考慮されていない。住む家はなく、水すら十分にない。入植者が大変な苦労を強いられているのを目にし、高茂は悩んだけれども、当時の立場では事態はどうしようもなかっ



大野ヶ原の集落。牧場や学校、民家がすり鉢状の地形に並ぶ。

た。悩み抜いた後、職を辞して一開拓者になると決める。「いままでに学んだ開拓の知識を皆と共に共有してこの地に理想郷を築こう」との思いだった。こうして開拓者としての困難な道に踏み込んだのだった。

その後、開拓組合が結成され、高茂は21歳で初代組合長に就任。住宅の補助を受け、各戸の住居を確保し、開墾を進めていった。道路、水道、電気という生活インフラを整えた。「県に相当無理も言いました」と振り返る。

当時最も深刻だったのは、栄養不足の状態で厳しい労働をしたため、病人が多かったことだ。戸板に載せて運んだり、おぶったりして下山するほかなく、医者に診てもらうころには手遅れになっていることもあった。

熊笹と萱を鍬でどけ、雑木の根を掘り出し、畑を広げていった。51年ごろからバレイショやトウモロコシが収穫できるようになったのが営農の始まりだ。地力の乏しい酸性の土壌、冷害と台風の被害に泣かされた。雑穀類を栽培したけれども、安定した収穫はできず、冷害や台風の被害を比較的受けにくい作物として、バレイショやダイコン、キャベツなどに栽培の比重が移っていく。

高茂は長野県の高冷地である八ヶ岳から「ケネベック」というバレイショの種イモを持ち帰り、本格的に栽培した。ダイコンの栽培も始め、葉付き泥付きといういまと同じ形での出荷だった。8～10月の端境期に出回る味の良いダイコンは人気を呼び、最盛期には50haも作付けされた。ただ、連作障害が出たり、市況に左右されたりし、安定性に欠けることが徐々にわかってくる。



1951年に杉皮葺きの自宅前で。左から２人目が高茂の父、牛の横に座っているのが高茂。



1974年にできたばかりの畜舎の入口に立つ高茂と妻・アヤ子。多頭化で経営の安定を目指した。

酪農で強い経営を

災害に強く、安定した経営を作るにはどうすればよいか。その答えが酪農だった。台風に一番強いのが牧草で、毎月安定した収入が入るからだ。「酪農によって災害に負けずに安定した経営ができるのではないか」

この思いを強くしていく。転機が訪れたのは59年だった。ダイコンの不作と、乳牛の子牛価格の暴落、和牛の価格の暴騰が重なった。当時、大野ヶ原では肉牛の和牛の飼育が盛んだった。このチャンスを逃すわけにはいかないと、和牛を売り、京都の丹波で乳牛を買い付け、各戸に2、3頭ずつ割り当てた。

飼料の確保ができていないなかでの導入で、とくに冬場に飼料が足りなくなると雪の中で熊笹を刈ることになった。最初の冬を越した牛は栄

一鍬ずつ切り拓いた原野

養のある飼料がなく、春には骨と皮だけで、人も牛も相当に苦労した。

その後、寒冷地に合った牧草を導入したり、夏場は牛を放牧する「夏季林間放牧」をしたり、サイロの建設で越冬飼料の確保をしたりと工夫を重ね、61年に搾乳が始まった。

「酪農が定着して初めて安定した経営ができるようになりましたね」

それからも共同の放牧場を整備したり、機械の導入を進め、のちに二世たちによって大型機械化体系が確立された。

「開拓当初、何もない原生林の世界だったのが、ここまで高度に変わるとは思っていなかったですね。なんとか人間が住むような環境ができればいいがという状態でしたから。機械化で、最初は草刈り機やトラクターが導入され、大型機械がどんどん入りました。想像もつかないスピードで経営が変わっていきましたね」

高茂はいま、森のほど近くのダイコン畑と家の裏の畑でキャベツやニンジン、セロリなどの栽培に精を出す。酪農経営は長男の正高が引き継ぎ、成牛40頭、育成牛13頭の計53頭を飼い、年に30万キロを搾る。ただ、酪農は厳しい時代を迎えている。

「乳価が安く、かえって水のほうが高いことがある。これだけ苦労して投資してやっておる牛乳が飲用水よりも安いなどということは、本当に考えられんです」

輸入飼料が高止まりしており、労力がかかるわりに利益が減ってきた。元々10戸以上いた酪農家は年々減り、5戸になった。去年までは正高が搾乳し、高茂がエサやりをしてきた。年齢もあって「もう限界」と思っていた酪農だが、今年、2人の孫が立て続けに戻り、経営を次の時代に引き継ごうとしている。京都の大学を出たばかりの尚紀と、大阪から妻と子どもを連れて戻ってきた佳紀だ。高茂も正高も後継者として戻ってくるとは思っておらず、驚いたという。



掘ったばかりの大野ヶ原大根。複数の品種を8～10月にわたって収穫する。



車で2時間ほどかけて高茂の作った大野ヶ原大根を買いに訪れた親子。
葉付き泥付きの状態に子どもたちは興味津々だった。



ダイコンの収穫を手伝う娘夫婦とアヤ子（右）。

「念を押したんです。『本当にやるんか』と言ったら、『帰ってやる』と言うもんですけん。助かります。戻ってきたのは牛が好きという気持ちがあったからだと思います」

後継者が戻り、地域に活気

後継者が戻っているのは黒河家だけではない。会合を開くと若い参加者が目に付く。他地域から大野ヶ原の会合に参加した人は一様に「若い人が多いですね」と驚くそうだ。地域には小学校しかないため、子どもたちは中学から実家を離れて寮暮らしを始める。高校、大学とずっと地元を離れるため、そのまま帰ってこないのではと思いきや、大学を出たタイミングや、一度外で働いた後でUターンする人が多いという。

「後継者が残るということは、下の低暖地にない経営ができるんですね。高原野菜にしても、観光にしても。愛媛という暖地のなかで、標高1000m以上の高冷地という気象条件を生かさん限り、大野ヶ原の生きる道はないと思うんですよ」

酪農に注力する人、冷涼な気候に合った花卉栽培をする人、観光客向けに牧場や飲食店を経営する人……。それぞれに下界ではできない経営を追求したことが、地域の活性化につながった。



53頭を飼育する。大野ヶ原の酪農家のなかでは規模が大きい。



右が孫の尚紀。今春に大学を卒業したばかりだ。

毎年「開拓祭」という祭りが開かれる。集落の人間が集まり、若者や子どもたちが楽しそうにしているのを見るのが何よりの楽しみだ。

「若い方が帰ってきていることが一番嬉しいですね。これが限界集落みたいに寂れていったら、なんで苦労したんじゃろうという気持ちにもなるじゃろうし。一世が苦労した甲斐があったと思います」

これからの大野ヶ原に期待することを聞くと「後継者が外に出ても、やはり大野ヶ原がいいと感じるような環境づくりが一番大事じゃないかと思います」との答えが返ってきた。

「後継者がどんどん帰ってきてくれるということ、都会の生活を知ったうえで帰ってくるということが一番プラスになると思うんです」

高茂の若かったころ、「農は国の基（もと）」という言葉が盛んに言われた。いまこの言葉を聞くことは珍しいけれども、「農業だけは国の施策に左右されやすい」という事実は昔もいまも変わらないと考えている。国はもっと地に足のついた農業政策を打つ必要があると指摘しつつ、「農業者自身が自立した農業をやっていくということ」も重要だと言葉に力を込めた。

（敬称略）